

## 『雪が降る』

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

日本では昔から、想像がつかない出来事が起こる気配を「雪が降る」と表現することがある。それは大方が想定外に悪い結末を指す。

昨年の英国・EU離脱、米国のトランプ氏・大統領選挙勝利なども、世界中が予想外と騒いでいるが、実際に国民投票を行う自国民にとっては、十分に想定内で「雪が降った」ほどの結果でもなかったように思う。

ところで「雪が降る」という比喩。当然に季節外れの降雪にこそ、話題性があるわけだが、最近のニュースを見聞すると、年々、天気予報に割く時間配分が高くなっているように思う。

天気予報を専属に担当する気象予報士や、お天気お姉さんは存在していたが、その地位、仕事内容を知らしめた森田さん以外は、大概の人が地味で控えめで、持論は述べずに、淡々と気象庁から伝えられる内容を報告するだけで、そのコーナーに面白みを感じる人

はいなかったものと推察出来る。

そこで昨今の報道番組内で、芸人のように率先してギャグを言い、キャスターからいじられては、おどけるといった姿を見る度に、仕事の役回り自体が変わってしまったように思う。

ここまで天気予報コーナーが主役になってきたのは、予測法、そのものが飛躍的に進歩したことにも起因するところであろう。

そしてショーアップは、テレビやラジオが、リアルタイムで所在地における気象情報を知り得るスマートフォン・アプリとの壮絶な戦いも影響しているのではと推察出来る。

新しい年が始まった。そこで、「雪が降る」ような悪事には見舞われず、天気予報に限らず、あまりにも正確過ぎる情報洪水に流されることなく、肩の力を抜いて、自然体で過ごしたいと思う。

1年間通せば、また暑い日のイメージが強いのであろうが、冬になれば寒くなり、さらに気温が下がれば雪が降るのも当たり前と思うが、東京での降雪を、全国ネットで先頭項目として伝えるテレビニュース。冬ともなれば当たり前前に雪が降り積もる北海道や東北地方に暮らす人々が見て、いったい、どう思うのだろうか。

## Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。  
北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。  
東京女子医大、筑波大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。  
日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。  
伊藤病院 www.ito-hospital.jp  
大須診療所(名古屋分院) www.osu-shinryoujyo.jp

